

「斜めからのまなざし」～訪問看護で支える、10代の心と暮らし～

看護師 矢野秀蔵

今回、不登校やひきこもりへの支援に取り組まれている峯上良平氏の講演を拝聴する機会に恵まれた。精神科看護に15年以上携わってきた私も、ひきこもりの背景のある患者に数例関わった経験があるが、その経験を端的に述べれば「もっと早く医療機関と継続した関わりで繋がれなかったのか」ということである。

私の関わったケースでは一度は医療機関に繋がったものの、数回の受診で終わっており、数年の空白を経た時には統合失調症様の急性期状態となっており手に追えなくなった家族が受診させたという経緯で、空白の期間がそのまま未治療の期間という状態であった。このケースから入院に至らずとも地域生活の中で治療につながることでできていたのではないかという思いが、不登校やひきこもりにある方々への思いとして強くある。

峯上氏の講演の中で自身が確かなものと感じられたものとして、支援の枠組みに「身体・ライスワーク・ワイフワーク」の三つの柱を明確にされていたことである。まずもって規則正しい生活が送れること、体調管理ができることが身体面と精神面を整える大切な基盤である。その基盤を基に最低限の社会生活が送られるように食べていけるだけの収入を得ることと、趣味ややりがいといった自分自身の精神的な満足感といった、ヒトがヒトとしての喜びを感じながらの支援のあり方を尊重されていた。

これは看護の中でも基礎の基礎といったものであるが、病院勤務中での看護というとそれが簡単なものではないことに気付かされる。業務優先の看護から蔑ろにされがちで軽視・見落とされがちである。訪問看護ステーションの中で個別に合わせたアセスメントから実践されている具体を聞くことができ、その関わりに羨ましい思いをしている自身の感情に気がつくことができた。

また個別の支援を聞かせてもらったが、利用者の心理的なアセスメントも行われており、利用者の精神的心理的なステップや状況に合わせる形でアプローチをされており、真似をするだけでは上手くいかない、訪問看護ステーションHullには、不登校・ひきこもりの専門性が随所に見え隠れしており、学びが大きかった。

和歌山県のみならず、本県でも同様に医療機関と繋がっていない不登校・ひきこもりの当事者がいる。自身の経験したケースから必要な時に必要な医療が提供され、少しでも早く回復し、地域社会での暮らしが楽しめるよう、今後も継続して学んでいきたいと思った。